

音楽祭が地域にもたらしたもの

～いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭の事例を中心に～

浅野 洋介

はじめに

今日、クラシック音楽のジャンルでは日本全国で数多くの音楽祭が開催されている。日本での音楽祭は、クラシック音楽の普及や芸術文化を通じた地域活性化といった様々な目的を持つが、目的の達成に貢献し得るよりインパクトの大きな事業として実施するためにはファンディングが鍵を握る。ファンディングとしては、チケットなどの受益者が負担するもののほか、自治体による出資、様々な助成金、企業による協賛、寄付が主な方法として挙げられ、あらゆる支援の獲得が模索されている。こうした支援を受けるためには支援者にその事業が生み出す価値を理解してもらう必要があるが、企業目線では音楽祭への協賛はどのような価値があるのだろうか。

『2022年度企業メセナ活動実態調査 [報告書]¹』によると、企業が芸術を支援する理由としては、「芸術文化支援のため」が多く、協賛する芸術分野を推進することに対する理解や共感が企業側にあることが前提となる。その上で、さらに詳しく考察してみると「地域の文化振興」、「地域社会との関係づくり」、「まちづくり・地域活性化」という意見が上位を占める。企業がなぜ芸術文化を支援するのかを理解するためには、その支援が企業と関連のある地域の発展に寄与することが重要であり、その発展がゆくゆくは自社の企業価値の向上につながるという企業側の考えが上記の調査より伺える。

この点を音楽祭に当てはめると、音楽祭の発展のためには企業の支援が不可欠だが、地域に何をもたらすかという点を明らかにすることで、企業の協賛のメリットが明確となることが推察される。本稿では、音楽祭の事例に絞り、その音楽祭が地域にもたらしたものを考察することで、音楽祭に対する企業協賛の意義の糸口を見出すことを目的とする。

1-1 音楽祭の目的の変遷

日本における音楽祭の目的を理解するためにその変遷を概観すると、まずその始まりは

¹ 2022年度メセナ活動実態調査 [報告書] (2023) p.10-11

1958年の「大阪国際芸術祭」（現大阪国際フェスティバル）であると云われている。この音楽祭は、一流の外来芸術家を招聘することが目的であり、こうした「コンサート型」の音楽祭は、当時東京以外でも優れた音楽を提供するために一定のニーズがあった²。1980年代に入ると、こうした大規模音楽祭は地方でも積極的に開催されるようになる。これは、1979年に大平正芳総理大臣が「文化の時代」及び「地方の時代」を提唱する中、先進的な自治体では国に先駆けて首長部局に文化課や文化室を設置し、これまで教育委員会社会教育課で所管していた文化事業を首長部局に移管していったことが一つの要因となっている³。これにより文化事業によりお金が投じられ、多くのホールが地方で建てられたり、地域活性化や地域のイメージ作りなど「町づくり」のために音楽祭が開催されるようになったりした⁴。しかしながら、こうした地方での音楽祭は、日常的にクラシック音楽を聴くことのない地域住民にとっては疎外されるものとなり、一流の演奏だけではなく地域との交流を取り入れた内容が目指されるようになる⁵。

1990年代に入ると、「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）のような国際的な音楽家の招聘を柱としながらも、地域住民にとって魅力ある町を創造していくことや市民同士の交流などに主眼が置かれる音楽祭が開催されるようになり、地域住民が企画・運営に積極的に参加する音楽祭も現れた⁶。また、パシフィック・ミュージック・フェスティバルや霧島国際音楽祭など優れた演奏家を講師として招聘し、プロフェッショナルな音楽家を目指す学生等をレッスンする「セミナー型」の音楽祭も多く見られるようになり、ここでも地域住民がボランティアで参加するなど地域との関わりが重要視されるようになった⁷。

今日の音楽祭を概観してみると、海外からの演奏家及び演奏団体の招聘を軸に置きながらも次世代の演奏家の育成や地域の文化交流など特に地方都市において複合的な目的を持

² 宮本直美は、音楽祭のジャンルを「コンサート型」「地域参加型」「セミナー型」の3つに分け、大阪国際芸術祭を「コンサート型」に分類している。（宮本「日本における音楽祭の変遷とオーセンティシティ」『社会学論』第62巻3号（2011）p.380）

³ 藤野一夫『みんなの文化政策講義～文化的コモンズをつくるために～』（2022）p.22

⁴ 伊志嶺絵里子「日本の音楽祭の活動状況とマネジメントに関する一考察」『文化経済学』第5巻第1号（2006）p.84

⁵ 宮本によるとこうした傾向は、世界的なもので、その一例としてアイルランドのゴールウェイ音楽祭に対するクインの考察を引用している（宮本同上 p.382）

⁶ 伊志嶺同上 p.84

⁷ 宮本同上 p.384

つ大規模音楽祭が継続して開催されているように見える。一方で、後程詳しく考察するが、ラ・フォル・ジュルネ音楽祭のように上質でありながらも低価格に設定することでクラシック音楽の振興を主目的とした新たな形も現れている。しかし、このような視点でも企業支援の視点でも地域に何をもたらすのかという点が共通の課題となっている。今回は、地方都市での開催で自治体と企業が共にバランスよく出資している音楽祭を考察することで、音楽祭が地域に何をもたらし得るか明らかにする。

1-2 事例の選択理由

本稿では、いしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭について考察する。この音楽祭は、クラシック音楽の公演を柱に、石川県と金沢市を中心に北陸三県が連携する形をとり、かつ北國銀行、北國新聞などの地元企業が数多く協賛している。石川県は、もともと伝統芸能が盛んな地域であるが、オーケストラを設立した。そして、ラ・フォル・ジュルネ音楽祭を誘致し、その上で2017年に名称変更を行い、現在の形に至っている。本稿では、この地域のクラシック音楽と音楽祭の振興の変遷をたどりながら、この音楽祭が地域に何をもたらしているのか考察することで、改めて音楽祭が持つ意義を明らかにする。なお、本稿の作成のためのインタビューは下記の通り行った。

実施日：2023年10月10日（火）

場所：石川県立音楽堂

話し手：

公益財団法人石川県音楽文化振興事業団事業部長 北村善哉氏

いしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター 杉野大輔氏

石川県文化振興課 松本季実氏

2-1 石川県金沢市の文化的背景

先述の通り、石川県は、もともと伝統文化が非常に豊かな地域である。北陸新幹線開通とともに2015年に制定された文化を推進するための自治体の法的根拠となる「いしかわ文化振興条例」では、石川の優れた文化としてオーケストラ・アンサンブル金沢をはじめ、「能楽」「邦楽」「日本舞踊」などの伝統芸能、「輪島塗」「山中漆器」「加賀友禅」「九谷焼」などの伝統工芸のほか、食文化など様々な文化が地域の特色として挙げられ、「文化の継承

と発展」、「文化に親しむ環境づくり」、「文化による地域づくり」、「文化の交流・発信」、「文化を支える仕組みづくり」の5つを文化振興施策の柱としている⁸。

現在の石川県は、能登半島を中心とした能登地方と金沢市を中心とした加賀地方を中心に成っているが、もともとは福井県から山形県の一部までの一帯が「越国」と呼ばれ、大陸との貿易によって栄えていた歴史がある。この越国は、越前、越中、越後に分かれ、現在の金沢市を含む石川県南部にあたる加賀国は越前から分離した地域である。加賀国は鎌倉時代には武家による統治のために「守護」が置かれるようになるが、室町時代に入ると浄土真宗の信徒による一揆によってその統治から解放される。このため加賀国は「百姓のもちたる国」と呼ばれた⁹。

その後、織田信長の家臣佐久間盛政の統治を経て、豊臣秀吉の時代に加賀国を統治したのが当時能登を治めていた前田利家である。前田家は徳川家とも良好な関係を築きはじめ、3代目の利常は、1634年に江戸幕府第3代将軍の徳川家光より加賀、能登、越中（現富山県）が与えられ、100万石を超える日本最大の藩「加賀藩」が生まれることとなった。

この加賀藩では、「加賀宝生」と呼ばれる宝生流の能楽、茶の湯の文化、大樋焼、九谷焼といった焼き物、金箔箔を使用した伝統工芸品などが育まれた。また、1689年に松尾芭蕉が金沢を訪れたことをきっかけに蕉風俳諧が流行し、俳諧の文化が広がったようである¹⁰。このことは、後の「金沢三文豪」と呼ばれる室生犀星や泉鏡花に影響を与えている。

石川県に魅力的な伝統文化の土壌を作った前田家は、今日においても「前田のお殿様」と呼ばれ、地域に強い影響を及ぼしている。そして、石川県はこの伝統文化を生かし、さらに国際的な交流を生み出す新たな文化としてクラシック音楽を迎えることとなる。

2-2 オーケストラ・アンサンブル金沢の設立と発展

伝統文化が根付いている石川県でクラシック音楽を中心とした音楽祭を開催するに至った背景には、1988年に石川県と金沢市が共同出資することで創設されたオーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）の存在がある。ここでは、その設立の経緯を振り返るとともにクラシック音楽を通じて石川県が目指したものを概観する。

⁸ いしかわ文化振興条例は以下の URL を参照

https://www.pref.ishikawa.lg.jp/muse/jourei/bunkashinko_jourei.html

⁹ 木越隆三監修『図説日本の城と城下町5 金沢城』（2023）p.16

¹⁰ 同上 p.148

石川県、および金沢市が OEK を設立したのは、OEK の初代音楽監督を務めた指揮者岩城宏之の尽力による。1971 年から名古屋フィルハーモニー交響楽団の初代音楽総監督を務めるなど、地方都市にオーケストラを設立することに意欲的だった岩城は、戦後に親戚を頼り一時的に住んだ金沢市にオーケストラを設立することを目指した¹¹。県側は主に教育的な理由からオーケストラの設立には前向きで、県の教育委員会の主導で設立の準備が進み、1988 年 6 月に運営団体として財団法人石川県音楽文化振興事業団が設立され、11 月に設立記念公演が金沢市文化ホールと金沢市観光会館（現金沢歌劇座）で開催された。

OEK の特徴は、第一にプロフェッショナルな室内オーケストラとして構想されたことである。地元の市民オーケストラを母体として編成する例があったが、岩城は初めからクラシック音楽の発信に寄与する国内随一の室内オーケストラの設立を訴えた。当時、ヨーロッパでも室内オーケストラの需要が高まっていたこともあり、自治体が運営する国内最初の常設の室内オーケストラとして、世界中から演奏家が集められ¹²、設立の翌年には海外公演も実施している。OEK のもう一つの特徴は、コンポーザー・イン・レジデンスの制度を導入したことである。専属の作曲家を抱え、新作初演を行うことで、国際水準のプロフェッショナルな室内オーケストラとして現代的かつ先鋭的なクラシック音楽を発信することになった。特に、加賀や能登の民謡などの音楽素材を取り入れたり、伝統的に邦楽が盛んな地域ゆえに邦楽とのコラボレーションを積極的に行うことなどを通じて、県の伝統文化の魅力を世界に発信する役割も持つようになった。

そのほか、各市町村単位に「児童・生徒オーケストラ鑑賞教室」を開催したり、ジュニアオーケストラを結成したり地域の芸術振興にも寄与する活動も盛んにおこなっている。1994 年 12 月 22 日発行の『地方行政』には、OEK の成果について「発足一年もたたないうちに異例のヨーロッパ公演を実施するなど、これまでに三回の海外公演を行ったほか、県内外で 600 回以上のコンサートを行ってきた。また、ベートーヴェンやモーツァルトな

¹¹ 当時の石川県教育委員会文化課長兼アンサンブル金沢事務局長の細川紀彦氏は、「今日本を見回すと音楽の拠点としてのオーケストラのない地域が二つある。一つは日本海側、一つは四国だ」「日本海側にその拠点をつくるのなら金沢こそが最もふさわしい土地」という話から我々の考えもかたまっていたのである」と回想している。細川紀彦「特色ある文化活動⑩オーケストラ・アンサンブル金沢の設立」『文化庁月報（7）』（1989）p.22-23

¹² 同上「今から N 響を上回る力を持つオーケストラを作ることは難しいが、まだ我が国にない本格的な室内オーケストラならトップを目指せるといふ岩城氏の考えは国際的にも小編成の動向が注目されていることを見通してのものであった。」

どの古典だけでなく、積極的に現代作曲家の新曲を演奏し、業界から大きな注目を集めている」「県音楽振興事業団も、これまでのアンサンブル金沢の実績について、①本県の音楽文化水準の向上②本県のイメージアップ③国内外に向けての文化の発信に寄与したと分析している」と記されている。

現在の OEK の本拠地である石川県立音楽堂は、2001 年 9 月 12 日に開館した。ハードを作ってからソフトを考えることが問題となっている日本では珍しく OEK の活動の広がりと共に本拠地となるコンサートホールの待望論が高まり、それがついに実現へと至ったのである。県立音楽堂は、金沢駅から徒歩一分の好立地に設立され、OEK の本拠地として優れた音響を持つコンサートホールの



石川県立音楽堂

ほか、多目的なホールである交流ホール、邦楽等伝統文化が盛んな地域であるゆえの邦楽ホールも併設された。

OEK は着実に活動を広げていき、海外の演奏家と共演も増えていった。特に、2005 年のペーター・シュライアーが指揮と福音史家を兼任した《マタイ受難曲》は、最も印象深い演奏会の一つとして挙げられる。

その翌年、初代音楽監督の岩城は、200 回目の定期演奏会を指揮したのち、逝去した。重責を伴う OEK の次期音楽監督には、2007 年より井上道義が就任することとなり、彼によって音楽祭が始まることとなった。

3-1 音楽祭の始まり～ラ・フォル・ジュルネ金沢～

指揮者井上道義が、OEK の音楽監督に就任した翌年にラ・フォル・ジュルネ金沢は始まった。風と緑の楽都音楽祭の前身となるラ・フォル・ジュルネ金沢は、今の音楽祭の基盤を形づくり、石川県における音楽の芸術振興の発展に寄与した重要な企画である。

そもそも、ラ・フォル・ジュルネは、1995 年フランス西部の港町ナントで生まれた音楽祭である。ナントは、ブルターニュ公爵城やサン・ピエール・サン・ポール大聖堂など歴史的な建造物が立ち並ぶ町で、貿易や造船業を中心に栄えていたが、1970 年代から 80 年代に入ると産業の転換がうまくいかず衰退していった町であった。そうした中、1989 年にジャン＝マルク・エイローという 39 歳の市長がナント市に赴任すると文化政策に力を入

れ、町は復興の道を歩いていった。ラ・フォル・ジュルネは、その地域の復興に寄与した代表的な企画の一つである。

ラ・フォル・ジュルネをプロデュースしたのは、ナント生まれのルネ・マルタンである。彼の革新的な企画は、ナントからポルトガルのリスボン、スペインのビルバオへと広がり、2005年から東京、2008年から金沢でラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンとして開催されるようになった。ラ・フォル・ジュルネの特徴は、世界的にクラシック音楽のコンサートへの来場者が減っていくことを危惧したマルタンがコンサートの値段に着目し、公演時間を平均45分とする代わりに一流の演奏家の演奏を低価格で聴けることにある。チケット代は、5～22ユーロ程度で朝から終電近くまで続けられる。ナント市では、この音楽祭を通じて高い経済効果が認められ、また、マルタンによると現地のオーケストラの年間定期会員が大幅に増えるなど地域の芸術振興にも大きな影響を与えた¹³ ¹⁴。

金沢のラ・フォル・ジュルネは、ナント市のラ・フォル・ジュルネでもロワール管弦楽団を指揮し、交流があった井上道義により、OEKを含め石川県における芸術文化のさらなる発展を目的に始められた。2005年から始まった東京のラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンが東京の中心である丸の内で開催されていることもあり、総来場者数が世界最大規模の32万人という成果を上げ、2007年には100万人を超えていた中で、人口約45万人の地方の中核都市である金沢市での開催は注目された。結果は、予想の5万人を超える8万人の来場者を獲得し、2010年以降は、10万人を超えるイベントへと成長していった。そして、2016年に第9回を迎えたラ・フォル・ジュルネ金沢は、より地域に密着した企画へと発展させるために終了し、翌2017年よりいしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭が始まることとなった。

金沢のラ・フォル・ジュルネの開催には、幾つか特徴があった。まず、運営は実行委員会形式をとり、石川県、金沢市のほか、歴史的に関係の深い富山県、福井県、および三県

¹³ マルタンはインタビューの中で「現地のオーケストラの年間定期会員が600%増えた」と述べている。林田直樹「新 この人に聞く(第4回)「ラ・フォル・ジュルネ音楽祭」アーティストック・ディレクター ルネ・マルタンさん」『音楽文化の創造』(2005) p.434

¹⁴ ナント市文化局長であったジャン＝ルイ・ボナン氏は講演会の中で「なぜ、10ユーロで提供できるのかといいますと、市からの補助金が出ているからです。…この「ラ・フォル・ジュルネ」には、16万人もの人がフランス中からやって来て、ホテルに泊まり、お金を使っています。計算したところ、彼らがまちに落としていくお金が、まちがフェスティバルに使う予算よりも多いことがわかったのです」と経済効果を認めている。ジャン＝ルイ・ボナン「文化でよみがえるフランスの地方都市ナント市：としま文化フォーラム特別講演会」『メセナセミナーシリーズ vol.7』(2004) p13-14

の経済団体、企業、文化芸術団体、観光業界などのメンバーによって構成されており、金沢市での公演が音楽祭の中心となるが、北陸三県で公演が行われる形をとっている。そして、実行委員会の会長には前田家 18 代当主の前田利祐が就いたことも特筆すべき点である。地域からの信頼が厚い前田家当主が会長を務めることで、地元企業や住民の理解が得られ、文化庁や地方自治体による補助金、企業からの協賛金、受益者負担（チケット等による収入）がそれぞれ三分の一ずつという理想的な形態となり、この運営体制は、現在も継続されている¹⁵。

内容においては、マルタンがプロデュースする海外アーティストを中心とした公演に加え、OEKを中心に地元のアーティストや邦楽奏者を登用した公演を実施している点が特徴として挙げられる。この地域の特徴を生かした企画が、のちの風と緑の楽都音楽祭の基盤となっており、次の項目でその詳細を述べる。

3-2 いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭

2017年よりラ・フォル・ジュルネ金沢から名称変更する形で始まったいしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭は、毎年4月末から5月上旬のゴールデンウィークに開催され、運営体制はラ・フォル・ジュルネ金沢と同じく石川県と金沢市を中心に北陸三県、及びその経済団体、文化団体等が参加する実行委員会の形をとっている¹⁶。2023年度を見てみると、5月3日（水・祝）～5月5日（金・祝）にメインプログラムを県立音楽堂のコンサートホール、邦楽ホール、交流ホール、金沢市アートホールで毎日4～6公演それぞれのホールで実施している。ほかにも5月4日は、北國新聞赤羽ホールでも5公演、無料のエリアイベントも3日間、金沢市内では10か所（市外でも2か所）で開催し、プレイベントとして開催した県内外での公演を含めると全182公演、来場者は101,062人を記録した。ここからは2023年度に開催された内容を中心に概観しつつ、同音楽祭の特徴を考察する。

3-2-1 招聘オーケストラ・アーティストと国際交流

この音楽祭では、フェスティバル・アドバイザーとして、作曲家の池辺晋一郎、青島広

¹⁵ この段落は、潮博恵『古都のオーケストラ、世界へ！』（2014）p.110～p.114に拠る

¹⁶ この音楽祭では、イメージキャラクターとして「ガルガンチュア」という、16世紀フランスの作家ラブラーの中世末期社会の権威と秩序を陽気に笑いとばす物語『ガルガンチュアとパンタグリユエル』の登場人物に由来したキャラクターを採用している。

志、加羽沢美濃、エッセイストのフランソワーズ・モレシャン、ピアニストの木村かをり、音楽ジャーナリストの潮博恵、音楽コーディネーターの伊藤透を迎え、ラ・フォル・ジュルネと同様にプログラムの方向性を明確に打ち出す「テーマ」が毎年設定されている。クラシック音楽の振興を目的としているラ・フォル・ジュルネでは、作曲家をテーマとして掲げることから始まり、徐々に「自然」など芸術的表現の核となる理念に近づいていったが、この音楽祭では、地域がテーマとして掲げられていることが多い。

表1 いしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭のテーマ一覧

2017年	第1回	ベートーヴェンが金沢にやって来た！
2018年	第2回	ウィーンの風に乗って、モーツァルトが金沢に降臨！
2019年	第3回	春待つ北ヨーロッパからの息吹 北欧とロシアの音楽 ～グリーグ、シベリウス、チャイコフスキー、ショパン～
2020年	第4回	世界の音楽、広がる和 ※新型コロナウイルス感染症の影響により中止
2020年	第4回	特別企画「音楽祭 秋の陣 2020」
2021年	第5回	南欧の風～イタリア、スペイン、フランス～
2022年	第6回	ロマンのしらべ～金沢が浪漫に染まる～
2023年	第7回	東欧に輝く音楽～プラハ、ウィーン、ブダペスト～

上記のテーマに沿って、国内外からアーティストが選出され、特にテーマに沿ったオーケストラの招聘が音楽祭の中心となる。2023年度は、コロナ禍以後初めて海外からヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団（以下、ヤナーチェク・フィル）が、そして、国内からは群馬交響楽団（以下、群響）が招聘された。

コンサートホールのプログラムを概観すると招聘オーケストラによる国際音楽祭にふさわしい華やかな競演が見えてくる。ヤナーチェク・フィルは、セントラル愛知の名誉音楽監督でもあるチェコの指揮者レオシュ・スワロフスキーを中心に、OEKのアーティストリック・リーダーである広上淳一、新進気鋭の若手女流指揮者沖澤のどかもタクトを振り、ドヴォルザークの代表作である《交響曲第8番》、《交響曲第9番「新世界より」》のほか、ウィーン・フィルのチェリストのセバスティアン・ブルーを迎えてのドヴォルザーク《チェロ協奏曲》、第76回ジュネーブ国際音楽コンクール第3位の五十嵐薫子によるリスト

《ピアノ協奏曲》、テレザ・マトロヴァ、トーマス・チェルニーらが参加するスメタナのオペラ《売られた花嫁》ハイライトと東欧の名曲を網羅するプログラムを全7公演（福井での公演含む）披露した。



ヤナーチェク・フィル
ドヴォルザークをウィーン・フィル俊英とともに

群響は、桂冠指揮者で東欧に縁が深い小林研一郎の指揮でスメタナの連作交響詩《わが祖国》とチャイコフスキー

《交響曲第5番》を演奏した。この充実した招聘公演に加え、林英哲の和太鼓との共演やモーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》のハイライトなどOEKの公演も行われた。そして、コンサートホールでの公演の締めくくりは、この音楽祭の人気企画の一つであるオペラ歌手による「紅白歌合戦」となっており、クラシック音楽のコアな客層からあまり馴染みのないライト層までが楽しめる国際色豊かなプログラムとなっている。

地元オーケストラがあるにも関わらず、国内外のオーケストラを招聘することのメリットについて、インタビューでOEKの北村氏¹⁷は「OEKは室内オーケストラの特徴を活かした大編成のオーケストラのプログラムを無理に取り上げない。そうした中、海外から特色のあるオーケストラだったり、大編成オーケストラを呼ぶことで聴き比べができることが聴衆にとっての音楽祭のメリット」と述べる。

加えて、「国内外からオーケストラを招聘することによって人的交流が生まれる。地方では情報が入りづらい部分もあるので、この音楽祭を通じて、色々な楽団を受け入れることでネットワークが生まれる。海外からのオーケストラを受け入れると、国際的な発信も求められているOEKが海外に行った際に迎えてくれる。そういう交流的視点も大切にしている。また、色々な団体を受け入れるとその団体が本拠地に戻った時に金沢でこういう音楽祭を盛大にやっているということを発信してくれて、それが新規来場者へとつながっている」と話す。

金沢から世界に向けた文化発信を行っているOEKならではの視点である。公演のスタイルとしてはラ・フォル・ジュルネと同じ形をとるこの音楽祭では、音楽祭という枠組み

¹⁷ 2023年10月10日実施インタビューにて（公財）石川県音楽文化振興事業団事業部長北村善哉氏

の中でクラシック音楽の振興を進めている。その一つとしての地方都市では難しいオーケストラの特徴を聴き比べる機会の提供は、さらにプロフェッショナルなオーケストラ同士の交流の場となり、国際的な協力関係を深める機会になっている。音楽祭という舞台が国際交流を生み出しているのである。

3-2-2 伝統芸能との連携

この音楽祭のもう一つの特徴は、地域の伝統芸能との連携にある。邦楽ホールでの公演は、クラシックを中心とした音楽祭としては珍しく各日、地元の邦楽や舞踊を交えたプログラムで始まる。特筆すべき公演としては、ハンガリーのバルトーク国際コンクール弦楽四重奏部門第1位で頭角を現したクアルテット・インテグラと日本を代表するダンサー田中泯と共演する企画や、ドイツ人ピアニストのマルティン・シュタットフェルト、ガルガン・アンサンブル¹⁸の管楽器メンバー、能管の演奏者で構成されるアンサンブルがムソルグスキーの「展覧会の絵」を演奏するのに合わせて、渡邊荀之助が能舞を披露する公演が挙げられる。



能舞×クラシックのコラボレーション
「展覧会の絵」

¹⁸ ガルガン・アンサンブルとは、音楽祭の公式キャラクターである「ガルガンチュア」に由来した北陸を代表する若手演奏家やオーケストラ・アンサンブル金沢の元楽団員等による小編成のオーケストラである。このオーケストラは2021年にこの音楽祭を通じて編成され、指揮者にはOEKの松井慶太、コンサートマスターには、カルテット・アマービレの1stヴァイオリン奏者である篠原悠那が務め、沖澤がミュージックパートナーとして加わっている。2023年1月より音楽祭の協賛企業でもある北國新聞が運営する北國新聞赤羽ホールが本拠地となり、音楽を通じた地域の芸術振興を目的とした活動を行っている。

このほかにも、邦楽ホールでは、ウィーン・フィルのフルート奏者カリン・ボネッリやバルトーク国際コンクールヴァイオリン部門第2位の高木凜々子をソリストとして迎えたOEK公演、ヘルシンキ大学男声合唱団やハンガリー・ジプシー・バンドの公演など多彩なプログラムが組まれた。

加賀藩で発展した伝統芸能は、クラシック音楽を中心としたこの音楽祭の舞台でも地域独自の色として大切に育まれている。ラ・フォル・ジュルネから風と緑の楽都音楽祭への名称変更を決めたのはこの地域色の打ち出しをより鮮明にするためであった。北村氏¹⁹は、「ラ・フォル・ジュルネというのはプロの出演者の演奏をみなさまと楽しむというコンセプトで、東京と同じものを金沢でもやっていたので、金沢としては地元の人もある、金沢の伝統芸能も活かすという金沢の独自色を出していきたいというところが決め手となった」と述べた。特に、「展覧会の絵」では、実際にムソルグスキーがこの作品を作曲するきっかけとなった彼の友人ハルトマンの絵画も舞台上に映し出され、その前で渡邊荀之助らが能舞を舞う国際色豊かな舞台で、北村氏²⁰は「文化庁でも評価の高い、金沢らしい公演」と語った。

ラ・フォル・ジュルネ時代から伝統芸能を活用した公演は実施されていたが、地元で考えている企画とマルタンの企画とが並走する形をとっていた。風と緑の楽都音楽祭への名称変更は、柱であるクラシック音楽の金沢企画と伝統芸能を取り入れた企画をより一体化するために必要だったと言える。

杉野氏²¹も「ラ・フォル・ジュルネを9回開催してきたなかで、音楽祭を開催するノウハウも蓄積できた。これなら独立して、県民の声を反映し、独自のアーティストを呼ぶということができるとのことです。新規一転リニューアルしたが、満足度も高い」と語った。

3-2-3 石川県全域への展開と市民参加

この音楽祭の特徴は、さらに石川県全域での芸術振興を担っていることである。2023年

¹⁹ 2023年10月10日実施インタビューにて（公財）石川県音楽文化振興事業団事業部長北村善哉氏

²⁰ 2023年10月10日実施インタビューにて（公財）石川県音楽文化振興事業団事業部長北村善哉氏

²¹ 2023年10月10日実施インタビューにていしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター杉野大輔氏

度のスケジュールを見てみると、プレイベントとして3月4日に能登地方の南端にある宝達清水町でガルガン・アンサンブルにも参加している富山県出身の金管五重奏団「かがやきプラス」による無料公演が開催されている。この公演を皮切りに、5月上旬まで石川県の各地で主に北陸出身の演奏家による様々なコンサートが行われている。会場はホールのみならず、お寺や水族館など観光施設での開催もある。

穴水町、白山市のプレイベントでは、地元の文化団体の推薦等による子供たちが演奏したり、中能登町では、地元の中学生と地元のプロフェッショナルなサクソフォン奏者と共演するなど教育的な意味合いが強い企画も行われている。また、5月5日に県立音楽堂交流ホールで開催される子供向け公演「いたずらこびとがやってくる」は津幡町、野々市市、羽咋市でプレイベントとして開催されるほか、5月3日に同邦楽ホールで開催される「オペラ歌手たちが競う！昭和歌謡大会」も珠洲市、内灘町でも開催され、金沢市に来ることが出来なくても音楽祭の公演を楽しむ機会も提供されている。2023年度は、初めて石川県全市町での開催となった。

表2 金沢市以外の石川県内市町で行われた公演一覧^{22 23 24}

市・町	日程	会場	出演者
七尾市	4/22	のとじま水族館	竹田樹莉果※、富田祥※
	4/22	和倉温泉加賀屋	竹田樹莉果※、富田祥※、大竹沙里
	4/30	七尾サンライフプラザ	かがやきプラス※
	5/1	能登演劇堂	「ドン・ジョヴァンニ」出演者
小松市	5/1	小松芸術劇場うらら	ハンガリー・ジプシー・バンド
輪島市	4/23	曹洞宗大本山總持寺祖院	竹田樹莉果※、富田祥※
珠洲市	4/30	ラポルトすず	「昭和歌謡大会」出演者
加賀市	4/29	山代温泉 専光寺本堂	竹田樹莉果※、富田祥※
	4/30	山代温泉 専光寺本堂	竹田樹莉果※、富田祥※

²² 下線は地域の文化活動者

²³ 太字は海外から招聘した演奏家

²⁴ ※印はガルガン・アンサンブルのメンバー

	5/1	山代温泉 ゆのくに天祥	「ソプラノ、チェロ、そして二胡&ハープの共演」出演者
羽咋市	4/16	コスモアイル羽咋市	「いたずらこびとがやってくる」出演者
かほく市	4/16	河北台中学校講堂	地元中学校吹奏楽部、 ガルガン・木管アンサンブル※
白山市	4/9	白山市松任学習センタープラ ラ	<u>白山市青少年音楽コンクール優秀者</u> 「売られた花嫁」出演者 アキユ・サクソフォンカルテットメンバ ー
	4/21	白山市松任学習センタープラ ラ	竹田樹莉果※、富田祥※、青島広志
	5/3	イオンモール白山	木米真理恵によるピアノ・トリオ
	5/4	イオンモール白山	「ソプラノ、チェロ、そして二胡&ハープの共演」
	5/5	イオンモール白山	アキユ・サクソフォンカルテット
能美市	4/30	能美市根上総合文化会館 「タント」	ガルガン・アンサンブル
野々市市	4/15	野々市市文化会館フォルテ	「いたずらこびとがやってくる」出演者
川北町	4/29	川北町文化センター	「ソプラノ、チェロ、そして二胡&ハープの競演」出演者
津幡町	4/8	津幡町文化会館「シグナス」	「いたずらこびとがやってくる」出演者
	5/2	津幡町文化会館「シグナス」	名古屋大学シンフォニック・ウィンズ
内灘町	5/1	内灘町文化会館	「昭和歌謡大会」出演者
志賀町	4/15	志賀町文化ホール	「ピアノ連弾で広がるブラームス&ドヴォルザークの舞曲」出演者
宝達志水町	3/4	宝達志水町役場	かがやきプラス※
中能登町	3/25	ラビア鹿島アイリスホール	<u>地元中学校バンド</u> アキユ・サクソフォンカルテットメンバ ー

穴水町	3/26	のとふれあい文化センター	奥能登ドレミ育成会推薦者 般若佳子※、鶴見彩
	5/5	のとふれあい文化センター	ムジ・コロレ
能登町	5/7	柳田植物公演 ※5/5 発生の地震の影響により 9/23 に延期開催	かがやきプラス※

松本氏²⁵は、クラシック音楽に対する石川県の取り組みとして「クラシック音楽に親しむ人を県内でも割合を増やすという目標があり、音楽祭を通じてより身近にクラシック音楽に親しんでほしいということを目指している」と述べた。この音楽祭は、芸術振興のシンボルにもなり、県全域に音楽に触れる機会を提供する機会となっている。それを成し遂げているのは、地元の演奏家の活躍であり、また、地元のアマチュアの演奏家、ジュニアオーケストラ、中学校の吹奏楽部、高校生、大学生といった幅広い年代の地域のアマチュア団体の参加も重要な柱となっている。それは、もはやクラシック音楽の垣根を超えた文化交流を生み出した。杉野氏²⁶は、「クラシック音楽だけではここまでの音楽祭にはならないと思う。クラシック音楽と昔ながらの石川の邦楽、そして地域の方々が気軽に参加できる。ホールだけでなく、色々な観光施設や、商業施設でも開催しているので、クラシック音楽に興味のない方々も気軽に聞けるような環境がある。クラシック音楽一本の音楽祭では、ここまで趣旨に賛同してもらえないと思う」と述べた。

3-2-4 広域での連携

この音楽祭では、ラ・フォル・ジュルネ音楽祭と同様、金沢市と共催で参加している富山県と福井県の駅でオープニングファンファーレを実施することで始まる。2023年度は、ファンファーレ以外に、ウイング・ウイング高岡（富山県）では、ポーランド出身のピアニストであるイグナツ・リシェツキのリサイタルとハンガリーの声楽アンサンブルムジ・コロレによるリサイタル、ハーモニーホールふくいでは、ヤナーチェク・フィル公演といった招聘公演を中心に富山県で6公演、福井県で2公演が実施されている。

²⁵ 2023年10月10日実施インタビューにて石川県文化振興課松本季実氏

²⁶ 2023年10月10日実施インタビューにていしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター杉野大輔氏

その中の、沖澤のどかが指揮したヤナーチェク・フィル福井公演では、コンサートホール公演と同じ「新世界より」を演奏している。加えてシューマンのピアノ協奏曲を地元福井県出身の中学3年生のピアニスト矢賀部光夏多が共演するプログラムで開催した。福井新聞によると海外オーケストラの公演にソリストとして矢賀部を抜擢した背景には、指揮者の沖澤による「年齢は関係ない」という発言が決めてとなったそうである²⁷。

全国的にあまり例がない複数の自治体の連携について、杉野氏²⁸は、「課題というより、メリットの方が多いと思っている。福井と富山が単独で招聘できないアーティストの招聘が可能であり、費用面で負担の軽減ができる。また、同じ時期に富山、石川、福井で開催することで、富山、福井の公演に来ていただいたお客様が石川に来たり、石川に来ていただいたお客様が富山、福井に行ったりなど、効果が出ている」と述べた。

3-2-5 企業との連携について

この音楽祭の運営体制は、先にも述べた通り、ラ・フォル・ジュルネ金沢の運営体制と同じく実行委員会の形をとっており、会長を平成30年までは前田家当主が、平成31年以降は池辺晋一郎氏が務めている。また、実行委員会には、地域の経済団体に所属している企業が入っており、こうした企業のつながりから協賛のアプローチが可能となっており、2022年度は120社を超える企業がこの音楽祭に支援している。杉野氏²⁹は、「企業からは協賛金という形で支援を受けている。実行委員会に入っている企業もあるし、実行委員会に入らずに支援される企業もある。実行委員会に入っている企業については、実行委員会で実施計画を策定するので、その場で企業の立場で意見をもらう。また、地域住民が親しめるよう無料公演を沢山開催しているが、企業と連携し、会場を提供いただいたり、当日の運営にご協力いただく場合もある。このほか、有料公演に企業の社員を招待したりもしている」と述べた。

地方都市での開催には、観光産業との結びつきも必要で、事業のインパクトが必要である。その点でも特色ある音楽祭を三県一市共催で規模を大きくして開催するメリットは大

²⁷前田佳寿人「14歳のピアニスト矢賀部さん チェコ名門オケと共演」『福井新聞』2023年5月23日

²⁸2023年10月10日実施インタビューにていしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター杉野大輔氏

²⁹2023年10月10日実施インタビューにていしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター杉野大輔氏

きい。また、伝統文化の特色のある金沢市は、ヨーロッパからの渡航者も多く、音楽を通じてこの地域を知り、伝統芸能にも親しんでもらう好循環が生まれているように見える。

企業の協賛を獲得するためにもう一つ重要な点は、金沢大学に経済効果の算出を依頼している点である。杉野氏³⁰は、「来場者アンケートで、来場者が県内で宿泊や食事にどれくらいお金を使ったか質問し、それをもとに大学で経済効果を算出いただいている。実際、県外からの来場者になぜ石川県に来たかというアンケートをとると、この音楽祭のために来たという回答が多いので、音楽祭の開催が、県内のホテルや飲食店の利用促進に貢献している」と述べた。2022年の経済効果に関する資料³¹によると、アンケートをベースにして算出される直接的な経済効果に加え、附随して生まれた雇用や資材の購入などの波及効果も含め、コロナ禍のため縮小しての開催であったにも関わらず（2022年の来場者数は71,209人）ではあるが、それでも音楽祭の支出予算の約4倍にあたる約8億円近くの経済効果が認められている。

地域の活性化に大きく寄与するこの音楽祭は、当然地域住民にも支持されている。松本氏³²は、「知事も音楽祭に対しては熱意がある。」と述べた。

おわりに

国際的なオーケストラやアーティストの招聘が軸となっている日本の大規模な音楽祭の課題は、特に地方においていかに地域に根付かせるかという点である。そのために、地域住民との交流や、「セミナー型」の音楽祭とするなどの方法がとられてきたが、加賀藩の伝統芸能とOEKがある石川県で開催される風と緑の楽都音楽祭では、地域の文化の発信の場となっていることが大きな特徴である。

石川県は、もともと世界に誇る伝統文化を持つ土壌でありながら、新しい文化としてクラシック音楽も受け入れ、育んできた。文化を育む土壌があるこの地では、音楽祭を通じて招聘する国内外のオーケストラやアーティストと地域の文化資源との交流が、クラシック音楽の振興に留まらないグローバル化した現代における新たな文化の醸成の方法となっている。そして、この音楽祭の素晴らしい点はクラシック音楽の広がり観点でも文化芸

³⁰ 2023年10月10日実施インタビューにていしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター杉野大輔氏

³¹ いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭2022実態分析報告に基づく

³² 2023年10月10日実施インタビューにて石川県文化振興課松本季実氏

術の国際的な発信においても着実な成果をあげ、地域住民に理解されていることである。

地域住民の理解のためには、一流の芸術とともに、地域住民の参加の観点から地域のアマチュア団体の参加を促進したり、地域に根差した活動をしている演奏者、団体を大切に活用することも重要である。こうした取り組みが、海外オーケストラ・アーティストとの招聘と結びつくことで地域に大きな国際交流を生み出し、音楽祭の新たな価値創造につながっている。その価値は、石川県全域や北陸三県までに広がり、芸術振興においても経済的にも地方都市にとって必要な活性化につながっている。地域にもたらすものが非常に大きく、明瞭であるこの音楽祭は、ラ・フォル・ジュルネの発展の中で文化振興条例の制定を通じて行政にも認められている。また、組織的に加賀藩前田家の当主や地域の企業、経済団体と協同する組織を作り、音楽祭を運営することで改めて地域の文化の価値への理解が広がり、企業の支援も得やすくなっている。風と緑の楽都音楽祭による地域文化の発信と交流は、企業が共感できる地域の発展に寄与するものとして、現代の日本の音楽祭の可能性を示している。

これからのさらなる発展に向けてのこの音楽祭の課題について、杉野氏³³は「新規来場者の獲得」を挙げ、「リピーターは多いが新規来場者に課題がある。クラシック音楽中心というのは間違いないので、曲目を見たときに難しいなと思われることもある。クラシック音楽に馴染みのない方にも来ていただけるような取組が必要なのではないのかと思っている」と語った。

そして、本稿を執筆している中、2023年11月27日に「ガルガンチュア音楽祭」への名称変更と「大西洋をわたる風 ～イギリス・アメリカの音楽～」という2024年度のテーマが発表された³⁴。本格的なクラシック音楽をより親しみやすくしつつ、さまざまなジャンルの音楽を世代を超えて楽しむ企画で開催されるとのことである。音楽祭が今後どのように発展していくか注目していきたい。

最後になりますが、2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被害を受けられた皆様が一日も早く平穏な生活に戻られるよう心よりお祈り申し上げます。

³³ 2023年10月10日実施インタビューにていしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭実行委員会事務局ディレクター杉野大輔氏

³⁴ 公式ホームページでの発表 <https://www.gargan.jp/news/news-6787/>

引用文献

- 伊志嶺絵里子「日本の音楽祭の活動状況とマネージメントに関する一考察」『文化経済学』第5巻第1号、2006年.
- 潮博恵『古都のオーケストラ、世界へ!』(2014) アルテスパブリッシング
企業メセナ協議会『2022年度メセナ活動実態調査 [報告書]』、2023年
- 小早川靖「オーケストラ・アンサンブル金沢 公的助成ルール化で赤字体質改善へ」『地方行政』、1994年
- ジャン=ルイ・ボナン「文化でよみがえるフランスの地方都市ナント市 : としま文化フォーラム特別講演会」『メセナセミナーシリーズ vol.7』企業メセナ協議会、2004年
- 林田直樹「新 この人に聞く(第4回)「ラ・フォル・ジュルネ音楽祭」アーティストック・ディレクター ルネ・マルタンさん」『音楽文化の創造』、2005年
- 藤野一夫『みんなの文化政策講義～文化的コモンズをつくるために～』水曜社、2022年
- 前田佳寿人「14歳のピアニスト矢賀部さん チェコ名門オケと共演」『福井新聞』2023年
- 細川紀彦「特色ある文化活動⑩オーケストラ・アンサンブル金沢の設立」『文化庁月報(7)』、1989年
- 宮本直美「日本における音楽祭の変遷とオーセンティシティ」『社会学論』第62巻3号、2011年
- 木越隆三監修『図説日本の城と城下町5 金沢城』創元社、2023年